

街道を歩く 東海道 近江路（関追分-坂下宿-土山--大津-京三条）

東海道近江

奈良に都があった頃は奈良—伊賀—伊勢—尾張のルートであったが、天智天皇が大津に都を移すと、近江を通るようになったが暫くの間であった。延暦 3 年（748）都が長岡京におかれますとまた近江を通るようになった。

その時は京都から大津に入り瀬田川を下り、野洲川の支流杣川沿いに（現在の草津線沿い）甲賀を抜け鈴鹿山系の南、倉歴（くらふ）峠を経て柘植に出るコースであった。

このコースは壬申の乱のとき近江京から脱出した高市皇子が柘植で大海皇子と合流したコースで知られる。

平安時代になると倉歴峠より北側、鈴鹿峠を越える「阿須波道」ができた。

鈴鹿に関所が、瀬田、岡田、甲賀に駅家が置かれた。斎宮群行はこのルートを通った。

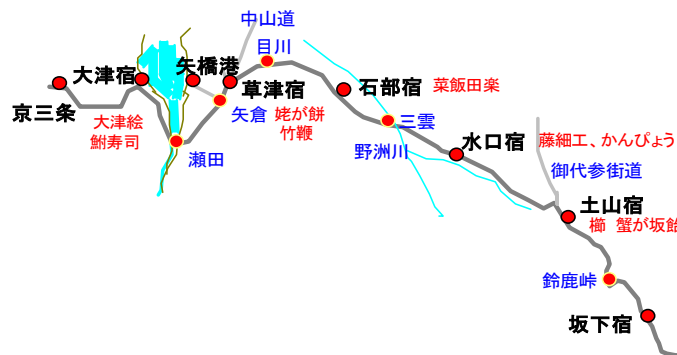
鎌倉時代になると鎌倉幕府と朝廷とのルートは東山道が主に利用された。建久 2 年（1198）源頼朝の上洛は美濃から柏原—野路。4 年後の上洛には鏡宿に泊まっている。阿仏尼の鎌倉行きもこのコース。このため鈴鹿峠のルートは主に伊勢参りに利用され伊勢大路、伊勢参宮道と呼ばれるようになった。

江戸時代になると鈴鹿峠越えのルートが近江の東海道ルートとなり、東山道は中山道に変わった。東海道五十三次の内、近江には土山、水口、石部、草津、大津が当初から置かれた。いずれの宿も以前から宿村として機能していた。

立場も山中（猪鼻）、大野三軒屋、田川、梅木、目川、矢倉、月輪新田、橋本、鳥居川、石場、大谷走井、追分にあり、飴、餅、蕎麦、田楽など名物が売られていた。街道には、鈴鹿峠、石部、野路、瀬田、逢坂峠など文学作品（物語、謡曲、詩歌）に登場する場所も多い。

目次

- ①：関西追分—坂下—鈴鹿峠
- ②：鈴鹿峠—山中—猪鼻—南土山—白川
- ③：白川—市場—今宿—新城—水口元町
- ④：水口元町—泉—三雲
- ⑤：三雲—石部—伊勢落
- ⑥：伊勢落—目川—草津—矢倉—野路
- ⑦：野路—瀬田—大津京町
- ⑧：大津京町—追分—日ノ岡—京三条



参考

桃花台中日文化センター「街道」を歩く講座テキスト
滋賀県の歴史散歩上下 株式会社山川出版社
近江東海道 淡海文化を育てる会 サンライズ出版
近江東海道中絵巻一、二 近江歴史回廊推進協議会
今昔東海道独案内 今井金吾 日本交通公社
街道ものしり辞典 児玉幸多監修 (株)主婦と生活社
2万5千分の1地図、亀山、鈴鹿峠、土山、水口、三雲、野洲、草津、瀬田、京都南北、東北 国土地理院
その他市町教育委員会発行史跡冊子、観光協会発行冊子、ガイドマップなど

H17/4—H17/11

あきやま ゆたか

H18 年 5 月

近江八景

